共有、旅人、新しい人間

——東日本大震災後の災害人類学の展開

木村周平
筑波大学

［災害、東日本大震災、協働、共有］

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　近年の災害人類学の展開
1 2010 年代の災害人類学
2 東日本大震災に関わる研究
Ⅲ　被災という経験を受け止める
1 語ること／聞くことの難しさ
2 協働・対話への試み
3 映像によるジレンマへの対応
4 展示・ミュージアムを通した共有
Ⅳ　立ち位置とスタイルの探究
1 旅人／寄寓者／同郷人
2 旅人という「あいだ」
Ⅴ　「新しい人間」と多重の時間

Ⅰ　はじめに

本稿の目的は災害[1]に関わる文化人類学的研究の新たな展開可能性を示すことである。そのため、東日本大震災後の動向を中心的に取り上げながら、文化人類学の研究群が持つ関心が、他の領域の取り組みや作品でどのように展開されているのか、そこから文化人類学は何を学びうるのかを検討し、災害の文化人類学の拡張を試みる[2]。

現在、地球規模の気候変動が急速に進行し、「人新世」という時代区分も定着してきた。気候変動に伴い災害の頻度は増し、しだいに日常化しつつある。そうしたなか、国際防災戦略（ISDR）や国連防災世界会議などを通じて、災害対応の変化を方向付けるような国際的な防災のパラダイムが形成されてきた［Jeggle 2020］。第２回国連防災世界会議（2005 年）で示された「兵庫行動枠組」、第３回同会議（2015 年）での「仙台防災枠組」などは「脆弱性」や「レジリエンス」、「ソーシャル・キャピタル」、あるいは「防災」（Disaster Risk Reduction）や「復興」（Build Back Better）などのキーワードを普及させるのに貢献した［木村・渡辺 2021］。

文化人類学を含めた災害研究も当然、こうした流れに影響を受けてきた。「レジリエンス」などの語彙は多くの研究で援用され［例えば Bankoff, Frerks & Hilhorst(eds.) 2004；山下 2020］、また批判的に検討されてきた［Manyena 2006 ; Moldonado 2016］[3]。

本稿はこうした時代状況や研究の進展を背景としつつ、これから災害に関わる人類学者や実践者に資するべく、幅広い研究や作品をマッピングしながら、今後の取り組みのための見取り図を提示する。

以下、第Ⅱ章で 2010 年代の世界的な研究動向と、東日本大震災後に現れた研究と論点を整理する。そのうえで本稿の中心部分に入る。第Ⅲ、Ⅳ章では、映像や展示、文学作品等にも目を向け、整理しつつ、それらが文化人類学的な研究に開く可能性を指摘する。最後に第Ⅴ章で、人類学の中心的課題のひとつである「人間」について災害を通して考える可能性を考察する。

Ⅱ　近年の災害人類学の展開

1　2010 年代の災害人類学

本節では近年の世界的な研究動向について整理し、次節以降の議論につなげる。

災害人類学では、パイオニア的存在である Oliver-Smith のペルー地震の研究［1986］が広く参照されてきた［例えば箭内 2018］。彼は２冊の編著［Hoffman & Oliver-Smith(eds.) 1999，2002］の後も、災害に伴う強制的な移転について熱心に取り組み

［Oliver-Smith(ed.) 2009］、また災害へのフォレンジック・アプローチ[4]を推し進めている［Oliver-Smith et al. 2016］。彼とともに災害研究に取り組んできた Button や Hoffman、その次の世代の Schuller や Barrios、Faas らは、実践人類学的な取り組みに重点を置き、例えば専門家・行政と被災者のあいだに広がる災害の捉え方や情報の「ギャップ」を、被災者に近い視点から批判的に論じている［Hoffman & Barrios(eds.) 2020］[5]。

こうした実務との連携に向かう方向の一方で、特定の災害を取り上げる研究も公表され続けている。民族誌としては、2001 年のグジャラート地震後の社会の変化、とくにヒンドゥー・ナショナリズムの台頭のもとでの再建に伴う宗教的政治的緊張感の高まりを「政治的バイオグラフィー」として描いた Simpson［2014］、2005 年のハリケーン・カトリーナの公的な被災者支援が、新自由主義的政策によって民営化され、イラク戦争に傭兵派遣していた民間軍事会社などが参入して混乱を生じる一方で、宗教的な団体が資金や参加者を集めて大いに活躍している様子を描いた Adams［2013］、2010 年のハイチ地震について、被害発生の構造的・歴史的な背景と、おもに医療者による緊急対応の制度の整備と実際の活躍を描いたファーマー［2014］らの著作が挙げられる。これらは、災害を手掛かりに、新自由主義や民族的ナショナリズムの高まり、グローバル・サウスなど、現地の人々や社会が直面する問題を探究するものである。

国内ではモノグラフは少ないものの、インド洋津波で被災した人々［林編 2010］、発災から時間が経った被災地の様子［林編 2015；清水・木村編 2015］、感染症パンデミックの諸相［浜田ほか編 2021］を扱った論集[6]や、グジャラート地震後の被災者の手仕事［金谷 2017］、2015 年のネパール地震後の祭祀の変容［伊東 2019］を扱った論文など、多数の研究が公表されてきた。

加えて、近年の注目すべき動きとしては、環境危機や気候変動への関心の高まりを背景にしながら、欧州や非英語圏（フランスやイタリア、中南米、中国など）における研究の活発化が挙げられる。ヨーロッパ社会人類学会（EASA）のもとに作られた DICAN（disaster and crisis anthropology network）というオンライン・ネットワーク（フェイスブックページは 2014 年開設、2022 年 3 月時点で 1000 人近い登録者がある）は、情報交換、学会でのパネルやシンポジウムの組織、出版などの 1 つの拠点となっている［例えば Revet & Langumier 2015；García-Acosta 2019］。防災の専門家集団を扱った Revet［2020］、気候変動対策がどう実際の政策や活動に落とし込まれるかを論じた Knox［2020］のように、新たな対象を扱おうとするものも現れている。

以上が近年の動きの概観である。まとめるなら、（1）実務や実践に向けた動き、（2）特定の災害に関わるエスノグラフィックな研究、（3）環境危機などの新たなトピックへの取り組み、が進んでいるといえる。

次節では 2011 年の東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故に関わる研究を、この 3 点から整理してみる。

2　東日本大震災に関わる研究

まず（1）に関して言えば、東日本大震災においても、実践的・学際的な取り組みが活発に行われている。震災発生直後、市野澤ほか［2011］は、災害の専門家でない文化人類学者「でも」できることがある、と書いた。だが実際には、文化人類学に近いところから、無形文化財に関わる動き［高倉・滝澤編 2014；高倉・山口編 2019］や文化財レスキュー［加藤 2019；木部編 2015：第 3 部；佐藤 2021；日髙編 2021］、あるいは災害記録誌への参加［宮古市東日本大震

災記録編集委員会編 2017］など、専門性を生かした活動が起きている。また、これまでも連携が見られた国際開発援助や地域研究の領域以外にも、民俗学や宗教学、建築学・都市計画学などの他分野との協働も生まれている［例えば饗庭ほか 2019］[7]。

次に（２）に関しては、いちはやく被災した人々や地域の様子を記述したギルほか［2013］や竹沢［2013］、より長期の支援の経験をもとにした内尾［2018］などの著作がある。これ以外にも、地域コミュニティや暮らし・生業［日髙編 2012；橋本・林編 2016］、伝統芸能［高倉・滝澤 2014；高倉・山口編 2018］、記憶や継承［Hayashi 2017］、観光［山下 2013］、インフラ［Kimura, S. 2016；高橋 2018］、外国人被災者［鈴木編 2012；李 2012］、原発事故避難者［辰巳・鳫 2017；竹沢 2022］など、被災した人々の生を構成する要素やかれらが直面する問題に着目した研究がなされてきた。

英語圏でも、原発事故後の市民活動や母子避難者［Kimura, A.H. 2016；Sternsdorff-Cisterna 2018］、除染後の人と環境［Morimoto 2021, 2022］、被災地での宗教者［Berman 2018］、防潮堤をめぐる対立［Littlejohn 2020a］、文化財や災害遺構［Littlejohn 2020b, 2021a, 2021b］など、被災した人々や被災地に関わる研究がなされている[8]。大まかな傾向として、日本の近代化の構造的問題［cf. 中田・高村編 2018］、「失われた 20 年」や地方衰退など現代史的な事象として震災・原発事故を位置づけ、分析するものが多いといえるが、日本をベースとした文化人類学とも共通する論点が扱われており、相互的な参照がより盛んになることが望まれる[9]。

（３）の新たなトピックに対応するものとしては、上で列挙した諸テーマを挙げることもできるが、それ以上に東日本大震災において目を引くのは、文化人類学的な研究と重なり合うような、多様な協働や共有に関わる取り組みである。それらは映像や展示、文学などを含み、必ずしも文化人類学者によるものではなく、文化人類学的な災害研究の議論と関連づけて考えることも十分になされているとはいえない。だが、そうした取り組みに目を向けることで、本節で取り上げた諸テーマについても、新たな展開が可能になると筆者は考える。以下では、上記の研究に共通するいくつかの論点へのアプローチの仕方について、文化人類学とその範囲を超える研究や作品を横断的に扱いつつ、議論を進める。

Ⅲ　被災という経験を受け止める

1　語ること／聞くことの難しさ

文化人類学者は、被災した人々への支援に関わりながら、徐々に調査をしていくこと［例えば清水 2021；内尾 2018 など、木村 2021 も参照］、その成果を、狭い意味でのアカデミックな業界内部だけでなく、より広いオーディエンスに向けて人々の声を発信していこうとすることが多い［例えば Fortun 2001］。そこでしばしば直面するのは、当事者の苦しみを理解すること、言葉にすることの難しさである[10]。

この点において、阪神・淡路大震災直後の自身の経験や心の揺れ動きを克明に記した蘇理の、「震災による辛く悲しい喪失体験や亡くなった人への思いは、他人には理解することのできない、自分の家族と周りの人が分かっていれば、他の人に分かってもらえなくてもいい、という考え方が多数を占める意見だといえる」［蘇理 2003：31-2］という言葉はいまなお重い［cf. 石戸 2017：第２章］。だが、遺体への対応では、はじめは戸惑いショックを受けつつも、慣れてくると、つい遺体の傍らで笑ったり、番号で呼んだり、跨いだりしてしまうようなこと

も起きる［石井 2011］。対応において「慣れ」は必要なことであろうが、しかしそうしたふるまいが当事者に与えるダメージの大きさは察するに余りある。

被災に伴う様々な経験はある人々を語ることから遠ざける。サファリングの問題系［クラインマンほか 2011］で論じられてきたように、しばしば長い時間を経た後でようやく語ることや聞（聴）くことが可能になることもある。その一方で、発災直後から積極的に外部に対するスポークスパーソンや語り部の役割を担う人も出てくるのもまた事実であり、外部者が当事者にそうしたふるまいを強いてしまう（必ずしも意図せずに）場合もある。そして、それぞれの態度の異同は、様々に影響しあい、お互いの考え方やふるまい、接し方を変化させもする。それはきわめて繊細なプロセスである。だからこそ被災者を一枚岩なものとして捉えたり、特定のイメージを当てはめたりするべきではない。このような状況に置かれた人々のことを考える上で、精神科医でもある宮地［2007］の環状島のモデル[11]や一連の議論は重要な手掛かりとなるだろう。

2 協働・対話への試み

こうした当事者に対して、文化人類学では、時間をかけて関わり、信頼関係を築き、協働していこうとしてきた[12]。この態度は第Ⅱ章第２節で取り上げた多くの研究に共通しているし、文化人類学に限らない。とくに原発避難の問題をめぐっては、社会学からの取り組み［例えば関編 2018］やルポルタージュ［吉田 2016］などがある[13]。そこでは、当事者の声を代弁しようとするのではなく、当事者自身が語れるように、対話や共著という方法も選択されている［cf. 山下・市村・佐藤 2013］。一例としてギルと庄司の試みを取り上げる[14]。二人は、震災直後に飯舘村長泥で出会い、その後時間を共にしてきた経験を対話――ギルの短い問いに対し、庄司が長い語りで応える――という形で文章化され、「悲劇だけではなく、賠償金が可能にした新しい人生」［ギル・庄司 2019：171］という、調査者側による編集で削除されてしまいがちな美しくない「真実」が伝えられる。

こうした試みは個の特異な語りを通じて、一枚岩的な当事者イメージを崩そうとする。だが、そもそも十分なイメージをもたない読者には、取り上げた少数の個が新たな代表性を帯びてしまう危険性もある。こうしたジレンマに対し、声の直接性や多数性を優先し、多くの当事者の声を集めて極力編集を入れないで刊行する方向性も取られている［金菱編 2012；とうしんろく編 2012；cf. 村上 1997］。これらは記録として大きな意義をもつ。しかし、収録されるのは必然的に「ある時点」での――それによる取捨選択を経た――語りに限られ、また全体のボリュームによる（膨大になり焦点を定めにくくなる、あるいは逆に個々の語りが相対的に薄くなる）別のジレンマもはらむ[15]。

こうした制約を乗り越えるための方法の一つとして、デジタルアーカイブを位置づけることもできるだろう。2011 年は「「デジタルアーカイブ元年」と呼ぶのが相応しい」［ゴードン・森本 2018；高倉 2021］と言われるほど、東日本大震災では多くのデジタルアーカイブがつくられ、膨大なデータが収集・保管・公開された。そのなかには、例えば日本災害デジタルアーカイブ（ハーバード大 https://jdarchive.org/ 2022 年 10 月 19 日閲覧）や「みちのく震録伝」（東北大 http://www.shinrokuden.irides.tohoku.ac.jp/ 2022 年 10 月 19 日閲覧）、あるいは「Voices from Tohoku」［Slater & Veselič 2014］（https://tohokukaranokoe.org/ 2022 年 10 月 19 日閲覧）のように、文化人類学者が関わっているものもある。だが、上記のような

ジレンマの解消は容易ではない。アーカイブに対する批判として、膨大過ぎてそれ自体を受け止めることができない［高倉 2021］、記憶や経験の個別性が失われる［宮前 2020］、当事者の主体的な関与が発揮できていない［青山 2020］などの意見が出されている。だが、被災者自身が制作側として参加するなど多様な人を巻き込んだ、せんだいメディアテークの「わすれン！」［佐藤・甲斐・北野 2018］や、AR 空間や AI に関わる技術を活用した先駆的な試み［渡邉 2019］など、当事者・利用者の主体的関与や全体性の把握という問題に対して有効な応答となっている取り組みも現れており、そこから文化人類学的な調査や公表の方法に応用できる点もあると考える。

3　映像によるジレンマへの対応

他の取り組みからの応用を考えるため、本節ではドキュメンタリー映像による上記のジレンマの乗り越えを見てみたい。

東日本大震災後には多くのドキュメンタリー映像が作成され、その数は 2013 年までの２年間のみで 800 を超えるとも言われる［是恒・高倉編 2021］。映画監督の渡辺智史のように、「映像をいちいち再生して見なきゃいけない」ため、文字や写真と比べると「動画の映像は記録的な情報量は多いかもしれないですがアクセスはしにくい」［是恒・高倉編 2021：196-7］という指摘もありうる。しかし、時間をかけて当事者と対話しようとしてきた文化人類学にとって、映像は２つの点で興味深い。

１つはその表現の仕方である。文化人類学もドキュメンタリー映画もいずれも現地で起きていることを記録し、伝えようとするものであり、似た点で困難に直面する。例えば茨城県つくば市に避難した人々とその支援をめぐる映像アーカイブ（「つくば映像アーカイブ」 http://sites.anthro.c.u-tokyo.ac.jp/tsukuba/ 2022 年 10 月 19 日閲覧）の撮影を担当し、『立場ごとの正義』を制作した田部［2019：91］は、自らが焦点を当てたものを、避難者と支援者の間の「外からの視点では見えにくい、きれいごとでは済まない」、「粘着質の、絡み合う何か」と表現する。前節までの議論と通じる、言葉にしにくい「何か」を、映像はどう表現するのか。

青山［2022］は映像作品や作者の言葉をもとに、この点を掘り下げている。例として、『なみのおと』などを制作した酒井耕と濱口竜介についての部分を取り上げる。二人は、「私なんかは全然被災者とは言えない」［青山 2022：216 に引用］とためらう人々に対し、「どのようなことでもいいので」と伝え、さらに被写体となる人が「真実の語り手」という見え方になることを避けるため、あえて自然な様子に見えない、「作為の痕跡」の残る映像としたという。具体的には、インタビュアーを入れず、親しい間柄の二人に語り合ってもらうこととし、まず対面で話すのを肩越しに映すカメラポジションで、次に両者の位置が斜めになるようにずらしてそれぞれが１台のカメラに正対してもらう、いわばカメラと人が Z 字になるようなポジションで撮影した。そのように撮影した映像のなかで、「いい声」（酒井らの表現）、つまり「あらかじめ用意された言葉を意識的に発するのとは違う、独特の質感をともなった語り方」［青山 2022：222］をしている部分を中心に編集したという。このようにして二人は、語ること／聞くことの難しさを越えて、田部の言う「何か」を、クリシエの隙間から見いだそうとした。Z 字ポジションや「いい声」はあくまで一例だが、こうした撮影と編集の方法は、災害の人類学が目指す「対話」を拡張するために応用できる部分もあるはずである。

もう１つの点は、映像が、文字で書かれ

たエスノグラフィーなどと比べて圧倒的に、多様な立場の人が共に観て、語り合うための場をつくりやすいこと、さらにそこでのコメントを作品に生かせる可能性が高いということである［是恒・高倉編 2021; cf. 川瀬 2015］[16]。書かれ、印刷されたものは一般に完成品と見なされ、意図しない権威を帯びたり、書き手と読み手の距離を生んだりしがちなのと比べて、映像はより持続的・対話的な編集が可能だといえるだろう。

このようにドキュメンタリー映像は、語る／聞くことの困難に対し、「対話」を開いたり、持続させたり、多層化するうえで大きな示唆を与えてくれると言える。

4　展示・ミュージアムを通した共有

上で問題にした個別性／代表性という問題や、対話や協働という方向性は、展示やミュージアムにおいても以前から問われてきたことでもある。展示やミュージアムはそれへの応答を通して、災害の当事者とそうでない者とをつなぐような試みを行ってきた。例として、阪神・淡路大震災の 10 年後に行われた『Someday, for somebody いつかの、だれかに——阪神大震災・記憶の＜分有＞のためのミュージアム構想｜展』［［記憶・歴史・表現］フォーラム 2005］を挙げる。そこでは当時の「人と防災未来センター」への違和感［寺田 2015］を念頭に、「出来事の当事者や非当事者という区別を前提にしない」記憶の「アクチュアリティ」の「分有」［笠原・寺田 2009］が目指された。そして、来場者が被災者の手記を自分で読み上げ、その声を自分で聴くような展示などによって、見る側の能動的な働きかけを誘発し、それによっていわば“内側”から体験してもらうことが試みられた。

東日本大震災後も、気仙沼市のリアス・アーク美術館の「被災物」展示などが注目を浴びた。そこでは、錆びたドラム缶や自転車、炊飯器など、津波によって破壊されたモノ（「被災物」と呼ぶ）を並べ、そこに気仙沼在住だったキュレーターが自らの経験をもとに想像した数百字のストーリーをキャプションにする、という通常ではありえない展示がなされた。これは賛否両論だったが、見に来た地元の人々の間のコミュニケーションを誘発したという[17]。

展示はさらに、制作するプロセスにおいて当事者を含めた様々な立場の人々と協働することができる可能性があることも重要である［高倉編 2015］。丹羽は映像や展示が「フィールドワークの経験をより多くの他者へとひらき、共有する場を創出」［2020: 335］すると述べる[18]。

もちろん映像や展示は、ここまで述べてきたジレンマを一気に解消するわけではない。しかし、観客の主体的な関与や、観客同士、あるいは制作側、当事者、外部者という立場を超えた対話を喚起し、それによって経験や事物を捉え直したり、言語化したりする手掛かりとなることができると筆者は考える。

以上、本章では被災経験の協働・共有に関わる取り組みとそれが直面するジレンマ、映像や展示などが示すその乗り越えの可能性について論じた。次章では、研究者の立ち位置について、とくに当事者と非当事者をつなぐという問題や、それと連動する記述や表現の方法に着目して論じる。

Ⅳ　立ち位置とスタイルの探究

1　旅人／寄寓者／同郷人

内山と辻本［2022］は、『津浪と村』［山口 2011（1943）］で知られる地理学者・民俗学者の山口弥一郎の生涯と研究を丁寧に整理し、柳田国男［1998］による「旅人の学／寄寓者の学／同郷人の学」という区分を援用して『津浪と村』を「旅人」期に位置

づけ、その後、「寄寓者」や「同郷人」としての研究に向かっていこうとしていたとする。以下、この議論を手掛かりに、研究者の立ち位置を考えてみる。

文化人類学的研究においては、長期のフィールドワークを行うこと、つまりこの３つでいうと「寄寓者」がスタンダードであり、その先に、「同郷人」――native's point of view――がある、といえるだろう。前章でも論じたように、それは災害に関しても同様であった[19]。

この災害に関し「同郷人になる」をまさに実践しているのは、大学退職後、福島県新地町に移り住み、漁業に従事する民俗学者の川島［2021］である。こうした経験から紡ぎ出される研究がきわめて意義深いものであることは言を俟たない。また川島の他にも、山内［宮地・山内 2021 など］や沼崎［Numazaki 2012］、開沼［2015］らは、被災地域出身として、当事者性と地域の歴史性の双方をふまえた発言を行っている。

他方で、東日本大震災に関わろうとする者にとって『津浪と村』が重要な指針となった［大矢根 2015 など］ように、「旅人の学」の意義も考える必要があるのではないか。筆者は、長期のフィールドワークや当事者へのコミットメントを強調することで、災害に関与しようとすることの間口がきわめて狭くなってしまいうるという懸念、さらに、とくに原発事故後に社会的に問題となった、当事者とそれ以外、あるいは意見の違いによる「分断」という問題への応答として「旅人」を捉えたいと考えている。以下では、この「旅人」というあり方の可能性を考察するが、そこで目指すのは「旅人」という言葉で浅く短い関与に免罪符を与えることではなく、多様な立場をつなぐためにどのような方向性が可能かを考えることである。これは前章の「共有」とも重なる問題である。

2　旅人という「あいだ」

「旅人」は、従来型でないフィールドとの関わり方である。関連して高倉［2014］は、第Ⅱ章第２節でふれた無形文化財に関わる動きのなかで、短期的・組織的な調査という、従来評価されてきた方向性とは逆のスタイルの意義を指摘している。また内山田［2019，2021］は、一か所にとどまっていては見えない巨大な「原子力マシーン」を、マルチ・サイテッドに追って旅を続ける。かれらが進める新たな方法の探求を手掛かりにして、ここでは小森はるかと瀬尾夏美の試みを取り上げたい。

小森と瀬尾は陸前高田市や仙台市で暮らしながら、様々な制作を行ってきた。『波のした、土のうえ』と題された映像作品は、現地で出会った人に聞き取りをし、それをその人物が「私」という一人称で反省や心情を語る文章にし、その文章を本人に見せて細かく調整したうえで朗読してもらい、その語りに合うような映像を重ねる、というかたちで制作された。二人はこうした制作手法を「協働」と呼ぶが、そこでは外部者である小森・瀬尾と当事者とが混じり合って「私」という一人称が構成されている。これについて、青山の議論を引用する。

> それが一人称である限りにおいて、そこで語られる〈私〉はあくまで個別の主観であり続けている。しかし、他者の介入によって書かれた〈私〉は、その住民自身とも同一化されず、テキストを書いた瀬尾に還元されることもできない、それでいて常識的にはフィクショナルな人物としても捉えられない（中略）。しかも、その住民の姿が視覚的イメージとして提示されることで、その連続性と差異が同時に現れている。その意味で、この〈私〉は容易には定位されがたい「揺らぎ」であ

るとも言える。この揺らぎは当事者という概念を揺るがせている。特定の人格のいずれにも還元することができず、それでいて強度のある語り手として立ち現れることで、当事者／非当事者という固定的な区分を解体・中和するだけでなく、震災という出来事に関わるための新たな特異点を創造している［青山 2022：269-70］

瀬尾は、自らをあくまで外部者、旅人と呼び、その立場を通して「“当事者”と“そうではない（と感じている）者”がいま一度出会う」［瀬尾 2019：345］こと、「互いにわかりあえないということを緩やかに了承しあいながら、起きてしまった災厄を分かちもつことによって、“それから”をともにつくり上げていく」［瀬尾 2019：312］ことを目指している[20]。重要なのは「あいだ」、当事者であり／でなく、外部者であり／でないような「揺らぎ」を生み出すことであり、そのためのスタイルにおける実験であるだろう。この「実験」は、注 13 でふれた実験的民族誌の系譜、また、いとう［2019］が内山田への書評で「資本の動き、暴力の魔、個の欲望、そのうぬぼれと弱さといった複層的なありようを描き出すには、小説に近いエセーの文体が必要とされるのだろう」と書いたことに通じる。

本章では、「旅人」というスタンスが、立場を超えた共有に向けて、エスノグラフィーの新たなスタイルを探求することにつながる可能性について論じた。次章では本稿の締めくくりとして、第 I 章で言及した「人新世」のような現在の時代状況を見据え、文化人類学の中心的な問いである「人間」について、東日本大震災に関わる研究からどのような展開が可能かを論じる。

V　「新しい人間」と多重の時間

災害は「人間とはいかなる存在か」、「その人がその人である（あった／あるいは今後もあり続ける）のはどのようにしてか」という問いをきわめて切迫した形で突きつける［木村 2016］。清水［2015］は、ピナトゥボ山噴火から 20 年が経過したアエタの人々が災害を契機にして変わっていく様をポジティブに捉え、その柔軟な適応力や潜在能力をもとに「新しい人間」というビジョンを示した。

ではこの「新しい人間」がいかなる存在か。アエタの人々は、外部の NGO などとの関わりのなかであり方を変化させていった。そうだとすれば、新型コロナウイルス感染症の流行初期に「新型コロナウイルスと人間の結びつきは、他の様々な存在者たちを巻きこみ、それらの変化と連動しながら、私たちのありかたを現に変えつつあ」る［猪瀬・久保 2020：169］として久保が「新型コロナ人間」を予告したように、「新しい人間」のあり方は、災害において何が起き、どのような帰結をたどっていくのかということと相互につながっていると考えることができる。それゆえここでは、「レジリエンス」などの概念に拠らず、東日本大震災との結びつきのなかで立ち現れてきた、いわば「東日本大震災人間」とでもいうものについて考えたい。

すぐに想像されるのは生権力的な議論だろう。Sternsdorff-Cisterna［2018］は、チェルノブイリ原発事故後に形作られた、被曝量、身体経験、経済補償などがない交ぜになった「生物学的市民」［ペトリーナ 2016］などの概念を手がかりに、科学を通し国家を批判的にみる能力に焦点を当て、「科学的市民（性）」という概念を形成した。原発事故直後、反原発デモなどが巻き起こったが、しだいに政治に関わることは（少なくとも表面上）忌避され、人々は放射線量測定な

どの「科学」に集中していった［Kimura, A.H. 2016］。こうした、自己責任を強調するような時代背景のもと、新型コロナウイルス感染症における疫学やウイルス学など含め、科学やテクノロジーが日常のなかに入り込み、それらへのアクセスや反応を通して人のあり方が形成されるという事態が進行している［cf. 木村 2014］。

しかし、東日本大震災が明らかにしたのは、そうした知と力の働きだけではなく、様々なもの（者／モノ）「とともに」ある人のあり方である。第Ⅱ章２節で取り上げた避難生活や復興についての研究群は、人を社会的な関係のなかにあるものとして見る、文化人類学にとっての中心的な考え方の実践的な意義を示しているし、内尾［2018：197］が「不可視の同伴者」と呼ぶように、死者もまた「とともに」の一部であるという重要な指摘をしてきた。

そうした人を織りなす関係性[21]には、日常的なモノや生き物など、人以外の存在も含まれる。加藤［2019］は文化財レスキューに関わるなかで、アルミ製の弁当箱や陶製の湯たんぽなど当事者が「捨てられなかったモノ」に出会い、そうしたモノを代替不可能な記憶・経験を帯びた存在として捉え（そこには宮前［2020］が注目する写真も含まれるだろう）、モノの「群」としての〈家〉に目を向けることを主張する［cf. Morimoto 2021］。このことは、人道支援に関わる調査から湖中［2018］が見出す、遊牧社会の避難民が携帯する、身体と一体化し、生の立て直しの起点となる「最低限のもののセット」のことを思い起こさせる[22]と同時に、上述の無形民俗文化財調査の成果を別の角度から再評価することにつながる。

他方で、モノとの結びつきは、人々の分断を生み出してもいる。東日本大震災後に現れた災害遺構と呼ばれるモノや建物は、それを残すべきか、それは何のためか、などについて多様な立場から意見が出、コンセンサスを得るのはきわめて難しい状況にある［Hayashi 2017］。ここでは、モノが持ちうる関係性の多様性＝モノが置かれうる文脈の多重性という人類学的な問題［ストラザーン 2015］がきわめて切迫した問いとなって立ち現れている。第Ⅲ章で論じた展示は、モノが、それと結びついている人々や場とどのような関係を持ってきたのか、これから持ちうるのかを見直す機会を提示する［Littlejohn 2021b］。それに対し、景観のなかに置かれた（situated）遺構や景観自体を同様に見直すのは決して容易ではない。

そこで重要になるのは、共有のための空間的な取り組みに加え、時間的な視点ではないか［cf. 関編 2015; Littlejohn 2021a］[23]。これは、１つには、「信頼の形成には時間がかかる」（第Ⅲ章）というなかで見える時間のことだが、もう１つには、この震災を通して生み出されてきた多重の時間のあり方のことを指す。

東日本大震災は固有の歴史的な出来事であると同時に、「津波常習地」［山口 2011］という言葉のように、災害の反復性を改めて認識させるものでもあった。さらに、放射性物質の半減期［cf. Morimoto 2021, 2022］のような、全く日常と異なる時間スケールを我々に示した。それらは、日常／非日常という区分を相対化させ、日常はあくまでも相対的な「災間」［仁平 2012］に過ぎないこと、「近代」のような直線的な時間で計画されたプロジェクト——そこにはもちろん、復興も含まれる——はいつでも一旦停止しうることを示した。放射性物質にせよ、あるいは牛やホタテにせよ、あるいは申請書類にせよ、我々の生は、意のままにならない、それぞれの時間をおしつけてくる他者たちとともにあり、日常というのはたまたまそうした異なる時間が都合よくコーディネートされていたにすぎない——という

のが、「東日本大震災人間」にとっての日常だといえないだろうか。

他方で、高橋［2018］が「一旦停止」から別の未来を垣間見ようとしたように、あるいは瀬尾［2019］が復興のなかで「あわい」と呼ぶ仮設的な時間を見いだしたように、東日本大震災を通して、物事を捉えるうえでの新たな時間を見いだそうとする動きも起きている[24]。こうした時間性を捉え、共有可能にしていくことは、この「人新世」と呼ばれる、災害とともにある時代において、ますます重要になるだろう。そのために、上で扱ってきた映像や文学の実験的な試みが手がかりになることは、言うまでもない。

災害から見える多重の時間をたどり、そうした時間を形作る多様な存在を、自然／社会という区分を超えて追いかけ、言語あるいは別の方法を通して、人々の経験を共有可能にしていくとともに、現実を生きる人々のあり方の理解を深めること。それが東日本大震災から見える災害人類学の今後の展開の可能性だと筆者は考える。

謝辞

本稿の改善に筆者の同僚や匿名の査読者のコメントは大いに役立った。また本稿を含め筆者の研究は、国内の災害の人類学的研究を先導してきた林勲男先生に多くを負ってきた。心より感謝します。なお、本稿は科研費の補助による研究（19H00558、20H01402、20KK0271）の成果の一部である。

[1] 災害とは何かについては、被害の発生因による分類や量的な被害、あるいは法律の条文や運用上の規定など、様々な観点からの定義・規定がありうる。本稿では Oliver-Smith［1996 : 303］の「自然環境および技術的環境からの、潜在的に破壊力を持つ主体と、社会的・技術的に生み出された脆弱さの条件のもとにある人々の組合せを含む一連のプロセス、あるいは出来事」という定義を、自然／技術／社会という区分を自明性なものとしないという留保をつけたうえで参照し、議論を進める。

[2] 災害の人類学に関わるレビューは Oliver-Smith［1996，1999, 2002］、Faas & Barrios［2015］、Barrios［2017］、木村［2013：序論，2016，2018a］、関谷［2019］など参照。人文地理学については祖田［2015］、社会学は室井［2020］、民俗学は小谷［2018］、災害科学は小野田・佃・鈴木［2021］を参照。

[3] 日本語の「復興」概念をめぐっては、日本災害復興学会が 2009-10 年度と 2018 年度の 2 度「「復興とは何か」を考える連続ワークショップ」を実施している［大矢根 2015a］。また、東日本大震災を契機に、歴史的に形成されてきた日本の復興をめぐる制度的なプロセスの特異性［cf. 小野田・佃・鈴木 2021］が意識化され、「近代復興」［岡村 2017］や「既定復興」［大矢根 2015a］などと名指されるようになっている。

[4] 法医学的とでもいうべき、被害がどのように起きたのか、その根本要因（root causes）まで徹底して遡って明らかにするもの。

[5] こうした研究の成果は、Button と Oliver-Smith が編者になっている Berghahn 出版の “Catastrophes in Context”シリーズや、*Annals of Anthropological Practices* 誌の 40 巻 1 号（2016 年）の特集“Continuity and Change in the Applied Anthropology of Risk, Hazards, and Disasters”などで公表されている。

[6] この他、『台湾原住民研究』誌には 2009 年の八八水害等の文化人類学的調査の成果が多数掲載されている。

[7] 国内外の宗教学からは、ここで言及した以外にも文化人類学とも関心を共有する多くの研究が公表されているが、本稿では十

分に扱えなかった。社会学に関しては、関心や方法の近さにも関わらず、相対的に交流が少ないように見える。むらの持続を見つめた植田［2016］や復興と生きがいを論じた望月［2020］、慰霊や追悼を論じた福田［2020］の研究など、文化人類学との対話がなされるべき著作は少なくない。

[8] Society for Cultural Anthropology や、Japan Anthropology Workshop のウェブでの発災10周年の特集もある［Slater & Allison 2021；Vainio, McGuire & Tso 2021-2］。前者が原発事故を中心に現代日本社会論に向かうのに対し、後者が津波被災地の人々に近いところから論じようとする、というトーンの違いが興味深い。

[9] 例外的に Littlejohn［2020b, 2021b］は日本の研究に大きく依拠しつつ、震災後の文化財保護の動きを批判的に論じている。

[10] Morimoto［2012］は記号論的人類学の立場からこの点の理論化を試みている。

[11] 宮地［2007］はトラウマ的な出来事に対し声を上げることの困難さを環状島のモデルを通してきわめて説得的に論じている。もっとも被害の大きな人は深い「海」のなかで語ることができず、遠い人は外側の無関心の「海」におり、その中間の「島」の上の人がだけが言葉を発するが、しかしその人々を語りから遠ざけ、「海」の中に引きずり込もうとする「風」が常に吹いている。

[12] しばしば、被災者からの贈与［スレイター 2013；内尾 2018］など、調査者／被調査者、支援者／被支援者という非対称の関係を超えるような動きに目が向けられる。

[13] 建築学や工学でも、被災地に住み込むなどの形で深く関わり合う研究者がいるが［柄谷・近藤 2016 など］、本節で言うジレンマはアプトプットの中で問題化されにくい。

[14] ギルと庄司が『精霊と結婚した男』や『ニサ』などを念頭に置いたと書くように、この協働には1970年代以降の「表象の危機」と呼ばれる問題への応答の歴史が反映されている［木村 2018b］。関連して、Weiss［2021］による、誰の言葉を固有名付きで引用し、誰の言葉を匿名の現地の声として記述するかの峻別をめぐる反省も参照。

[15] 中間的な方法として、語りのみの章を設けることもある［清水 2021；竹沢 2022］。

[16] Rouch の提唱した「共有人類学」という言葉も参照。また、金と地主らの取り組み［金・地主編 2021］は必ずしも災害と関わるわけではないが、研究者とアーティストが映像を一緒に見て語るだけでなく、そこで語られたことや齟齬についてさらに語り、考察を加える興味深いものである。

[17] 2014年10月5日開催の国立民族学博物館共同研究「災害復興における在来知」での山内宏泰の講演による。

[18] これは柳沢［2021］の録音作品の制作と共有という大変興味深い試みとも通じる。

[19] この点はドキュメンタリー映像とも重なるところがある。土本典昭はドキュメンタリスト３原則として「その土地に住めるか、その土地の嫁をもらえるか、その土地で死ねるか」を挙げる［三浦 2021：114］。表現は時代がかっているが、これは「同郷人になる」ことだと言える。

[20] これは東［2017］の「観光客」論を踏まえて小松［2018］があえて言う「ふまじめさ」の許容による当事者性の拡大にも通じる。

[21] Morimoto［2022］はこの関係について、Nozawa［2015］が展開した「縁」という語を援用しながら論じている。

[22] 情動を喚起しつつ、ロジカルな対立を超えて、モノと人、さらに人同士のつながりを生み出すものとしての食も興味深い［五十嵐・「安全・安心の柏産柏消」円卓会議 2012；小松 2018；Kimura & Inose 2019］。

[23] 人と防災未来センターには今も、高齢にな

った被災者などから新たな寄贈があるという（人と防災未来センター「資料室ニュース」参照 https://www.dri.ne.jp/material/publication/news/ 2022 年 10 月 19 日閲覧）。収集と展示の時間の多重性も考えるべき点である。

[24] もちろん、そこで見える未来は必ずしもよいものではない。災害の多発により十分に支援が行き届かず、災害前からの問題が増幅されるままで忘れられていく被災地が多くなり、「災害サイクル」が成り立たなくなっている――もはや「災害復興」は起きない――という予測も含まれる。

参照文献

饗庭伸ほか 2019『津波のあいだ、生きられた村』鹿島出版会.

青山太郎 2022『中動態の映像学——東日本大震災を記録する作家たちの生成変化』堀之内出版.

東浩紀 2017『観光客の哲学』ゲンロン.

五十嵐泰正・「安全・安心の柏産柏消」円卓会議 2012『みんなで決めた「安心」のかたち—ポスト３.11 の「地産地消」をさがした柏の一年』亜紀書房.

石井光太 2011『遺体』新潮社.

石戸諭 2017『リスクと生きる、死者と生きる』亜紀書房.

市野澤潤平ほか 2011「東日本大震災によせて」『文化人類学』76(1): 89-93.

伊東さなえ 2019「ネパール・カトマンドゥ盆地における震災下のローカリティの生産——瓦礫と祭りの関係に着目して」『アジアアフリカ地域研究』19(1): 1-27.

いとうせいこう 2019「「原子力の人類学」書評　世界の構造をエセーの文体で」『朝日新聞』2019 年 11 月 23 日掲載. (『好書好日』 https://book.asahi.com/article/12901926 2022 年 9 月 15 日閲覧.

猪瀬浩平・久保明教 2020「忘却することの痕跡——コロナ時代を記述する人類学」『現代思想』48(10): 152-71.

植田今日子 2016『存続の岐路に立つむら』昭和堂.

内尾太一 2018『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』東京大学出版会.

内山大介・辻本侑生 2022『山口弥一郎のみた東北——津波研究から危機のフィールド学へ』文化書房博文社.

内山田康 2019『原子力の人類学——フクシマ、ラ・アーグ、セラフィールド』青土社.

——— 2021『放射能の人類学——ムナナのウラン鉱山を歩く』青土社.

大矢根淳 2015a「現場で組み上げられる再生のガバナンス——既定復興を乗り越える実践例から」清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会——復興の物語を再創造する』京都大学学術出版会 pp.51-78.

——— 2015b「小さな浜のレジリエンス——東日本大震災・牡鹿半島小渕浜の経験から」清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会——復興の物語を再創造する』京都大学学術出版会 pp. 267-97.

岡村健太郎 2017『「三陸津波」と集落再編——ポスト近代復興に向けて』鹿島出版会.

小野田泰明・佃悠・鈴木さち 2021『復興を実装する——東日本大震災からの建築・地域再生』鹿島出版会.

開沼博 2015『はじめての福島学』イースト・プレス.

笠原一人・寺田匡宏 2009『記憶表現論』昭和堂.

加藤秀雄 2019「瓦礫の中の民俗学——宮城県気仙沼市における被災資料収集の経験から」及川祥平・加藤秀雄・金子祥之・クリスチャン・ゲーラット編『東日本大震災と民俗学』成城大学グローカル研究センター pp.17-36,

金谷美和 2017「手仕事を復興すること——インド西部地震被災地の布工芸生産者」『人類学研究所 研究論集』4: 24-44.

金菱清編 2012『３.11 慟哭の記録——71 人が体感した大津波・原発・巨大地震』新曜社.

［記憶・歴史・表現］フォーラム 2005『Someday, for somebody いつかの、だれかに——阪神大震災・記憶の＜分有＞のためのミュージアム構想｜展・2005 冬神戸』［記憶・歴史・表現］フォーラム.

柄谷友香・近藤民代 2016「自主住宅移転再建」その動機と功罪——津波被災者のレジリエンスに学ぶ」橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書店

pp.176-96.
川島秀一 2021『春を待つ海——福島の震災前後の漁業民俗』冨山房インターナショナル.
川瀬慈 2015「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画——エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80 (1): 6-19.
木部暢子編 2015『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』勉誠出版.
金セッピョル・地主麻衣子編 2021『葬いとカメラ』左右社.
木村周平 2013『震災の公共人類学——揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社.
——— 2014「未来の地震をめぐるリスク——日本における地震の「リスク化」プロセスの素描」、東賢太朗ほか編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』世界思想社 pp.83-103.
——— 2016「人類学における災害研究——これまでとこれから」橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書店 pp.29-43.
——— 2018a「災害とリスクの人類学」桑山敬己・綾部真雄編『詳論　文化人類学』ミネルヴァ書房 pp.279-94.
——— 2018b「公共性」前川啓治ほか『21 世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』新曜社 pp.189-221.
——— 2021「東日本大震災からの「復興」とフィールドワーク」『文化人類学』86(2): 314-9.
———・渡辺知花 2021「災害への「備え」におけるコンテンツ化と翻訳——日本の国際援助における研修と応用の観察から」床呂郁哉編『わざの人類学』京都大学学術出版会 pp.231-53.
ギル, T.・庄司正彦 2019「当事者が語る——一人の強制避難者が経験した福島第一原発事故」関谷雄一・高倉浩樹編『震災復興の公共人類学——福島原発事故被災者と津波被災者との協働』東京大学出版会 pp.169-94.
クラインマン, A.ほか 2011『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』坂川雅子訳, みすず書房.
小谷竜介 2018「民俗学として被災地と関わる」『日本民俗学』293:101-13.
湖中真哉 2018「東アフリカ遊牧社会の現場からみた新しい人道支援モデルに向けて」湖中真哉・太田至・孫暁剛編『地域研究からみた人道支援——アフリカ遊牧民の現場から問い直す』昭和堂 263-82.
小松理虔 2018『新復興論』ゲンロン.
鈴木江理子編 2012『東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店.
是恒さくら・高倉浩樹編 2021『災害ドキュメンタリー映画の扉——東日本大震災の記憶と記録の共有をめぐって』新泉社.
ゴードン, A.・森本涼 2018「日本災害 DIGITAL アーカイブの展開と展望」『デジタルアーカイブ学会誌』2 (4): 347-52.
佐藤大介 2021「私記・宮城での歴史資料保全活動 20 年——古文書を通じた地域との交流、そこでの「３・11」から考えたこと」標葉隆馬編『災禍をめぐる「記憶」と「語り」』ナカニシヤ出版 pp.197-242.
佐藤知久・甲斐賢治・北野央 2018『コミュニティ・アーカイブをつくろう！——せんだいメディアテーク「３がつ 11 にちをわすれないためにセンター」奮闘記』晶文社.
清水展 2021『噴火のこだま［新装版］——ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会.
———・木村周平編 2015『新しい人間、新しい社会——復興の物語を再創造する』京都大学学術出版会.
菅豊 2013『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店.
ストラザーン, M. 2015『部分的つながり』大杉高司ほか訳 水声社.
スレイター, D. 2013「ボランティア支援に

おける倫理――贈り物と返礼の組み合わせ」T. ギルほか編『東日本大震災の人類学――津波、原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院 pp.63-98.
瀬尾夏美 2019『あわいゆくころ――陸前高田、震災後を生きる』晶文社.
関礼子編 2015『“生きる”時間のパラダイム――被災現地から描く原発事故後の世界』日本評論社.
――― 2018『被災と避難の社会学』東信堂.
関谷雄一 2019「序論　災害に抗する公共人類学への誘い」関谷雄一・高倉浩樹編『震災復興の公共人類学――福島原発事故被災者と津波被災者との協働』東京大学出版会 pp.3-27.
―――・高倉浩樹編『震災復興の公共人類学――福島原発事故被災者と津波被災者との協働』東京大学出版会.
祖田亮次 2015「人文地理学における災害研究の動向」『地理学論集』90(2): 16-31.
蘇理剛志 2002「阪神・淡路大震災と慰霊――『震災モニュメント』以前」岩本通弥編『現代民俗誌の地平 3 記憶』朝倉書店 pp.14-40.
高倉浩樹 2014「結――東日本大震災に対する無形民俗文化財調査事業と人類学における関与の意義」―――・滝澤克彦編 2014『無形民俗文化財が被災するということ――東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社 pp.290-311.
――― 編 2015『展示する人類学――日本と異文化をつなぐ対話』昭和堂.
――― 2021「デジタル・アーカイブと映画から考える災害映像記録の価値」是恒さくら・高倉浩樹編 2021『災害ドキュメンタリー映画の扉――東日本大震災の記憶と記録の共有をめぐって』新泉社 pp.237-57.
―――・滝澤克彦編 2014『無形民俗文化財が被災するということ――東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社.
―――・山口睦編 2019『震災後の地域文化と被災者の民俗誌――フィールド災害人文学の構築』新泉社.
高橋五月 2018「福島沖に浮かぶ「未来」とその未来」『文化人類学』83(3): 441-58.
竹沢尚一郎 2013『被災後を生きる――吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社.
――― 2022『原発事故避難者はどう生きてきたか――被傷性の人類学』東信堂.
辰巳頼子・鳶咲子 2017『つながりを求めて――福島原発避難者の語りから』耕文社.
田部文厚 2019「『立場ごとの正義』――自主避難者の視点から映像を撮る」関谷雄一・高倉浩樹編『震災復興の公共人類学――福島原発事故被災者と津波被災者との協働』東京大学出版会 pp.87-104.
寺田匡宏 2015「神戸という記憶の＜場＞――公的、集合的、個的記憶の相克とすみわけ」清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会――復興の物語を再創造する』京都大学学術出版会 pp.115-60.
とうしんろく（東北大学震災体験記録プロジェクト）編 2012『聞き書き 震災体験――東北大学 90 人が語る３.11』新泉社.
中田英樹・高村竜平編 2018『復興に抗する――地域開発の経験と東日本大震災後の日本』有志舎.
仁平典宏 2012「＜災間＞の思考――繰り返す 3・11 の日付のために」赤坂憲雄・小熊英二編『「辺境」からはじまる――東京／東北論』明石書店 pp.122-58.
丹羽朋子 2020「窓花を〈うつす〉窓花展――人類学的表現実践としての映像と展示制作」『国立民族学博物館研究報告』45(2): 319-58.
橋本裕之・林勲男編 2016『災害文化の継承と創造』臨川書店。
浜田明範ほか編 2021『新型コロナウイルス感染症と人類学――パンデミックとともに考える』水声社.
林勲男編 2010『自然災害と復興支援』明石書店.
―――編 2015 『アジア太平洋諸国の災害復興――人道支援・集落移転・防災と文

化』明石書店.
日髙真吾編 2012『記憶をつなぐ――津波災害と文化遺産』財団法人千里文化財団.
―――編 2021『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』臨川書店.
ファーマー, P. 2014『復興するハイチ――震災から、そして貧困から 医師たちの闘いの記録 2010-11』岩田健太郎訳 みすず書房.
福田雄 2020『われわれが災禍を悼むとき――慰霊祭・追悼式の社会学』慶応義塾大学出版会.
ペトリーナ, A. 2016『曝された生――チェルノブイリ後の生物学的市民』粥川準二監訳, 森本麻衣子・若松文貴訳 人文書院.
三浦哲哉 2021「東日本大震災後に映画を観るということ」是恒さくら・高倉浩樹編『災害ドキュメンタリー映画の扉――東日本大震災の記憶と記録の共有をめぐって』新泉社 pp.106-17.
宮古市東日本大震災記録編集委員会編 2017『東日本大震災宮古市の記録』第 2 巻（下）《記憶伝承編》』宮古市.
宮地尚子 2007『環状島=トラウマの地政学』みすず書房.
―――・山内明美 2021「環状島の水位を下げる――震災とトラウマケアの 10 年」『現代思想』49(3): 8-22.
宮前良平 2020『復興のための記憶論――野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー』大阪大学出版会.
村上春樹 1997『アンダーグラウンド』講談社.
室井研二 2020「方法としての災害社会学――理論的系譜の再検討」『西日本社会学会年報』18: 7-19.
望月美希 2020『震災復興と生きがいの社会学――〈私的なる問題〉から捉える地域社会のこれから』御茶の水書房.
箭内匡 2018『イメージの人類学』せりか書房.
柳沢英輔 2021「フィールドレコーディングを主体とする実践的な研究手法としての音響民族誌の方法と課題」『文化人類学』86(2): 197-216.
柳田国男 1998「民間伝承論」『柳田国男全集８』筑摩書房 pp.3-194.
山口弥一郎 2011『津浪と村』石井正己・川島秀一編 三弥井書店.
山下晋司 2013「復興ツーリズム論――3.11 以後の新しい観光」『季刊家計経済研究』99:15-37.
――― 2020「序 ＜特集＞文化遺産、ツーリズム、防災――レジリエンスの観点から」『文化人類学』85(2): 242-53.
山下祐介・市村高志・佐藤彰彦『人間なき復興――原発避難と国民の「不理解」をめぐって』明石書店.
吉田千亜 2016『ルポ母子避難――消されゆく原発事故被害者』岩波書店.
李仁子 2012「外国人妻の被災地支援――被災地の民族誌に向けた一素描」川村千鶴子編『3.11 後の多文化家族――未来を拓く人びと』明石書店.
渡邉英徳 2019「「記憶の解凍」――資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承」菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門――開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版 pp.388-412.
Adams, V. 2013. *Markets of Sorrow, Labors of Faith: New Orleans in the Wake of Katrina*. Duke University Press.
Bankoff, G., G. Frerks & D. Hilhorst (eds) 2004. *Mapping Vulnerability Disasters, Development & People*. Earthscan.
Barrios, R. E. 2017. What Does Catastrophe Reveal for Whom? The Anthropology of Crises and Disasters at the Onset of the Anthropocene. *Annual Review of Anthropology* 46:151-66.
Berman, M. 2018. Religion Overcoming Religions: Suffering, Secularism, and the Training of Interfaith Chaplains in Japan. *American Ethnologist* 45(2): 1-14.
Faas, A. J. & R. E. Barrios 2015. Applied Anthropology of Risk, Hazards, and

Disasters. *Human Organization* 74(4): 287-95.

Fortun, K. 2001. *Advocacy after Bhopal: Environmentalism, Disaster, New Global Orders*. University of Chicago Press.

García-Acosta, V. (ed) 2019. *The Anthropology of Disasters in Latin America: State of the Art*, Routledge.

Hayashi, I. 2017. Materializing Memories of Disasters: Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunami. 『国立民族学博物館研究報告』41(4): 337-91.

Hoffman, S. M. & R. Barrios (eds) 2020. *Disaster upon Disaster: Exploring the Gap between Knowledge, Policy and Practice*. Berghahn.

Hoffman, S. & A. Oliver-Smith (eds) 1999. T*he Angry Earth: Disaster in Anthropological Perspective*. Routledge.

———. 2002. *Catastrophe and Culture: The Anthropology of Disaster*. University of New Mexico Press.

Jeggle, T. 2020. Advocacy and Accomplishment: Contrasting Challenges to Successful Disaster Risk Management. In S. M. Hoffman & R. Barrios (eds.) *Disaster upon Disaster: Exploring the Gap between Knowledge, Policy and Practice*, pp. 41-69. Berghahn.

Kimura, A. H. 2016. *Radiation Brain Moms and Citizen Scientists: The Gender Politics of Food Contamination after Fukushima*. Duke University Press.

Kimura, S. 2016. When a Seawall Is Visible: Infrastructure and Obstruction in Post-tsunami Reconstruction in Japan. *Science as Culture* 25(1): 23-43.

———. & K. Inose 2019. How Has ANT Been Helpful for Public Anthropologists after the 3.11 Disaster in Japan? In A. Blok, I. Farias & C. Roberts (eds) *The Routledge Companion to Actor-Network Theory*, pp.369-77. Routledge.

Knox, H. 2020. *Thinking Like a Climate: Governing a City in Times of Environmental Change*. Duke University Press.

Littlejohn, A. 2020a. Dividing Worlds: Tsunamis, Seawalls, and Ontological Politics in Northeast Japan. *Social Analysis* 64 (1), 24-43.

———. 2020b. Museums of themselves: Disaster, Heritage, and Disaster Heritage in Tohoku. *Japan Forum* 33 (4), 476-96.

———. 2021a. Ruins for the Future: Critical Allegory and Disaster Governance in Post-tsunami Japan. *American Ethnologist* 48(1): 7-21.

———. 2021b. The Potential of Intangible Loss: Reassembling Heritage and Reconstructing the Social in Post‐disaster Japan. *Social Anthropology* 29(4): 944–59.

Manyena, S. B. 2006. The Concept of Resilience Revisited. *Disasters* 30(4): 434-50.

Moldonado, J. 2016. Considering Culture in Disaster Practice. *Annals of Anthropological Practice* 40(1): 52-60.

Morimoto, R. 2012. Shaking Grounds, Unearthing Palimpsests: Semiotic Anthropology of Disaster. *Semiotica* 192:263-74.

———. 2021. Home Otherwise: Living Archives and Half-life Politics in Post-Fallout Coastal Fukushima. *Cultural Anthropology* 36(1): 573-9.

———. 2022. A Wild Boar Chase: Ecology of Harm and Half-life Politics in Coastal Fukushima. *Cultural Anthropology* 37(1): 69-98.

Nozawa, S. 2015. Phatic Traces: Sociality in Contemporary Japan. *Anthropological Quarterly* 88(2): 373-400.

Numazaki, I. 2012 Too Wide, Too Big, Too Complicated to Comprehend: A Personal

Reflection on the Disaster That Started on March 11, 2011. *Asian Anthropology* 11: 27-38.

Oliver-Smith, A. 1986. *The Martyred City: Death and Rebirth in the Andes*. University of New Mexico Press.

———.1996. Anthropological Research on Hazards and Disasters. *Annual Review of Anthropology* 25: 303-28.

———. 1999. What is a Disaster? In S. Hoffman & A. Oliver-Smith (eds) T*he Angry Earth: Disaster in Anthropological Perspective*, pp.18-34. Routledge.

———. 2002. Theorizing Disasters: Nature, Power, and Culture. In S. M. Hoffman & A. Oliver-Smith (eds) *Catastrophe and Culture: The Anthropology of Disaster*, pp.23-47. University of New Mexico Press.

———. (ed) 2009. *Development & Dispossession: The Crisis of Forced Displacement and Resettlement*. School for Advanced Research.

Oliver-Smith, A. et al. 2016. *Forensic Investigations of Disasters (FORIN): A conceptual framework and guide to research*. Integrated Research on Disaster Risk.

Revet, S. 2020 *Disasterland: An Ethnography of the International Disaster Community*. Translated by C. Schoch & K. Throssell. Palgrave Macmillan.

———. & J. Langumier (eds) 2015. *Governing Disasters: Beyond Risk Culture*. Palgrave Macmillan.

Simpson E. 2014. *The Political Biography of an Earthquake: Aftermath and Amnesia in Gujarat, India*. Oxford University Press.

Slater, D. H. & A. Allison (eds) 2021. 3.11 Politics in Disaster Japan: Ten Years Later. https://culanth.org/fieldsights/series/3-11-politics-in-disaster-japan-ten-years-later 2022 年 10 月 19 日閲覧.

Slater, D. H. & M. Veselič 2014. Public Anthropology of Disaster and Recovery: "Archive of Hope". *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 115-26.

Sternsdorff-Cisterna, N. 2018. *Food Safety after Fukushima: Scientific Citizenship and the Politics of Risk*. University of Hawaii Press.

Vainio, A., J. McGuire & C. Tso (eds) 2021-2 JAWS online series of Reflection on Tōhoku. https://japananthropologyworkshop.org/jaws-online-series-of-reflection-on-tohoku/ 2022 年 10 月 19 日閲覧.

Weiss, M. 2021. The Interlocutor Slot: Citing, Crediting, Cotheorizing, and the Problem of Ethnographic Expertise. *American Anthropologist* 123(4): 948-53.

英文要旨

Sharing experiences, becoming a traveler, and exploring the ways to be human: Advancements in the anthropology of disaster after the Great East Japan Earthquake

Against the backdrop of intensifying climate change and the developing international paradigm of disaster risk reduction, this study reviews a wide range of works related to the Great East Japan Earthquake (hereafter, 3.11), offering possible future directions for the anthropology of disaster. By mapping the possibilities, the study aims to support future encounters of anthropologists and practitioners with disasters. To do so, first, the global research trends in the anthropology of disaster during the 2010s, as well as the anthropological works related to 3.11, are summarized. Second, the study examines the efforts by anthropologists, as well as film directors and curators, to make the experiences of the 3.11 understandable for and sharable with the wider public. Third, the concept of traveler is developed as an anthropologist's stance to bridge the gaps related to the experience with and opinion on 3.11. Finally, the potential of the anthropology of disaster that can contribute to the study of the human is explored.